

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-21

アイルランドの文学的伝統とジェイムズ・ ジョイス(7)

YUKI, Hideo / 結城, 英雄

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

76

(開始ページ / Start Page)

67

(終了ページ / End Page)

78

(発行年 / Year)

2018-03-13

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014419>

アイルランドの文学的伝統と ジェイムズ・ジョイス（7）

結 城 英 雄

文化遺産としてのジョイス

すでに述べたように、ケルティック・タイガーの時代、アイルランドの著名な作家たちのうちでも、ジェイムズ・ジョイス、なかんずく『ユリシーズ』がその象徴的な役割を果たした。たとえば、2001年にはダブリンとホーリーヘッドを結ぶ高速船〈ユリシーズ〉が進水した。その名のとおり、船内のすべてにわたり、物語の内容に即する内装がほどこされている。そして翌2002年には、『ユリシーズ』の草稿を1,260万ユーロもの高額で落札し、国立図書館に収めた。ジョイスは経済成長と国際化の波に乗ったアイルランドの象徴そのもので、『ユリシーズ』はアイルランドの文化遺産であった。

その一方で、2004年6月11日、アイルランドの市民権をめぐる国民投票が行われた。これまでアイルランドで生まれた子どもに対して、またその両親に対しても、無条件でアイルランドの市民権が与えられていた。そのため、アフリカの国々から出産間際の妊婦が、大量に観光で入国する事態が頻発したのだ。アイルランドの市民権を獲得することで、EU圏内での自由な往還が可能となっていたことも追風となっていたのだろう。アイルランドは移民を送り出す貧困な国であったため、市民権をめぐる条項は手つかずであったのだが、事態は深刻であった。EUの国々からの異議もなく、アイルランド側の一方的な人種差別的な国民投票によって、これまでの条項の削除が決定した。

ケルティック・タイガーの時代、アイルランドはどうやら矛盾を抱えていたことになる。国際的な相貌をかこちながら、世界からの投資を期待すると同時に、自国のアイデンティティの構築という口実によって立ち、人種差別政策を布こうとしていたのである。そしてこの矛盾は、百年前の『ユリシーズ』の主人公、レオポルド・ブルームの国籍とも深く関わっている。彼はアイルランドで生まれたことから、アイルランドの市民権を持つと主張してはばからない（U: 12.1430-31）。にもかかわらず、父親がユダヤ人であったことを知る市民たちは、彼を余所者と見做している。このブルームの市民権を含む『ユリシーズ』の解釈は、2004年の市民権をめぐる国民投票と無縁ではないはずだ。

アイルランドの歴史を顧みるなら、ケルト民族だけでなく、デーン人、アングロ・ノルマン人、アングロ・サクソン人といった人種の混合であり、19世紀後半にはユダヤ人の流入もあった。こうした状況を称して多文化主義と呼ぶことも可能であるが、カトリックである土着のケルト人は、アングロ・サクソンのプロテスタントであるイギリス人により支配されてきた。これがアイルランドの実情であった。したがって、アイルランド人をケルト人に限定する当時の議論は、イギリスの植民地支配からの独立を

謀ろうとする、民族主義者たちの理念の要であっただろう。

にもかかわらず、1845年に勃発した大飢饉を契機として、アイルランドは数多くの移民を世界に送り出してきた。その移住先は、イギリス、アメリカ、カナダ、あるいはオーストラリアなど世界各地にわたる。民族主義者たちの人種差別には、そうした実情が顧みられていない。それにもまして移民し他国で国籍を獲得した人々のことを考慮する余裕もなかった。そのような状況で成立したのが1937年の憲法で、アイルランドで生まれた子、またその両親に市民権を与えると記載された。「市民権」云々は民族主義に有効な概念であっただろうが、当時、移民してくる人はほとんどなく、アイルランドの外国人嫌悪は沈静化していたにすぎない。そうであれば、1904年6月16日を舞台とした『ユリシーズ』に対し、その百年後に噴出した国民投票の意味を問い、ジョイスが文化遺産である理由を挙げねばならない。

二つの立場

ここで『ユリシーズ』の人種差別に対する、ケルティック・タイガーの時代の二つの意見を挙げておきたい。一つはブルームにアイルランド人のアイデンティティを重ね、自国の多文化礼賛の意識を賛美するものである。これはデクラン・カイバードの立場で、アイルランド人はブルームと同じく、単一の文化論にこれまで疑義を唱えてきたとしている（Kiberd, 154）。もう一つはブルームが移民の状況を具現する存在であり、その疎外には今日の移民者の苦悩が暗示されているというものだ。これはロニット・レンチンの立場でもあり、アイルランドは自由国成立のころより、人種差別の政策を布いてきたとしている（Lentin, 233）。きわめて対照的な発言だ。

カイバードとレンチンとの比較は、ジェイソン・キングが2004年のブルームズデイとの関わりで試みている。実のところ、6月11日に市民権をめぐる国民投票が行われた直後のブルームズデイで、レジスタンスが起こった。国民投票の結果に対する憤懣の爆発であったのだろう。メインストリートのオコンネル通りでのことで、多様な人種の人々によるレジスタンスのパフォーマンスが繰り広げられた。ブルームズデイは『ユリシーズ』の祝祭日であり、『ユリシーズ』はアイルランドの文化遺産である。国民投票とジョイスの物語との間に齟齬があったことは言をまたないが、ジェイソンはカイバードの指摘が修辞学的であるのに対し、レンチンの立場は現実的であるとしている（King, 96）。

カイバードの論点を支持するのに都合が良いと思われるのは、『ユリシーズ』第14挿話である。この挿話の舞台は国立産婦人科病院で、冒頭部で出産が言祝がれ、アイルランドは昔から妊婦を大切にしてきたと語られている。事実、物語ではブルームの知人、ピュアフォイ夫人が男子を出産している。同時にこの挿話は英文学の文体模倣で綴られ、最後はスラングで終わっている。この手法は今日の〈「英」文学〉の状況を先取りするものであった。〈英文学〉というこれまでの概念にはアイルランド文学も含まれていたが、今ではオーストラリア、南アフリカ、インド、カナダなど英語圏の文学の総称として、〈「英」文学〉という言葉を使用する向きが多い。イギリス国内でも〈スコットランド文学〉や〈ウェールズ文学〉と冠せられた文学研究も流通している。要するに、英文学はもはや単一の概念ではなく、多

様な英語文学を包摂する概念である。

こうした路線で『ユリシーズ』を読むかぎり、カイバードの論もそれほど間違っていない。そしてヴィンセント・チェンが早くも2000年に、多様な人種を包摂するアイルランド事情を称賛している（Cheng, 259）。もっとも、『ユリシーズ』第14挿話は英文学のアンソロジーを基にした文体模倣であり、カイバードの解釈とは異なり、英文学の発展というもっともらしいイギリス文学賛美への風刺である。この視点を無視しての議論が不毛であることは前もって述べておきたい。

その一方、百年前のブルームの疎外感を想起する必要がある。たとえば、『ユリシーズ』第7挿話でブルームと同じ新聞社で働く校正係のナネッティという人物を前にして、ブルームは彼がイタリア人であると独白し、故国を見たことがないと同情を示している（U: 7.110）。ナネッティは国会議員も兼務する人物で、ブルームと同じくアイルランド生まれでありながら、それでも彼はナネッティを「余所者」と意識しているのだ。これはアイルランドで生まれたならばアイルランド人であるという、第12挿話のブルーム自らの宣言と矛盾すると思われる。が、そこにはアイルランド文化における他者としてのブルームの疎外が投影されている。第15挿話でのブルームの数々のユートピア幻想は、そうした現実からの逃避願望の現れであるだろう。

カイバードと対照的なのがレンチンで、ジェyson・キングは移民者としてのブルームに寄せる彼女の共鳴を賛美している。彼は『ユリシーズ』がユダヤ人としてのブルームの宣言の物語であるとするネイル・デイヴィソン（Davison, 185）に対し、むしろ他者であるアイルランド人へ向けたブルームの共鳴に物語の本質を読む。この論には飛躍がある。キングがブルームに共鳴するのは、移民を受け入れるホスト国の国民が、ブルームの心情に倣うべきであるとの期待があるからだ。しなしながら、ブルームが他者であることに変わりはなく、その視点をアイルランド人が受け入れていたならば、国民投票という事態に至ることはなかったであろう。そう考えて間違いない。

毎年祝われているブルームズデイによって、ジョイスがアイルランド人作家であるとのブランドを印象づけられるものの、自国民にとってのジョイス評価は曖昧なままである。ジョイスが世界的に評価されていることは国民の誇りではあるし、ケルティック・タイガーはアイルランドが開かれた国家であるとの意識も培ってきた。その一方で、アイルランド国民は百年前の記憶を喪失し、ブルームを疎外していた人種差別に想い至ることはない。ジョイスが『ユリシーズ』に描き込んだ大陸的な視点は忘れられて久しい。おそらく「ジェイムズ・ジョイス」というシニフィアンを再考すべき時期はすでに到来している。そのための手続きとして、百年前の歴史を追認しておくことにする。

記憶と歴史

スティーヴンは『ユリシーズ』第2挿話で、悪夢としての歴史に憑かれている。この一日、彼は母親の記憶を手繰り寄せ、死の床にある彼女のために祈りを捧げなかったことで、罪意識に苛まれているのだ。カトリックの教えに従うことを拒んだにもかかわらず、そしてそのために臨終の母親の願いを受け入れなかったが、その母親の面影が繰り返し現れ、スティーヴンは苦しめられている。母親とともに観

劇した幼少のころのこと、母親の大事にしていた些末な形見、あるいは幼少のころに母親のピアノ伴奏で歌ったことなど、これまでのスティーヴンの過ぎさりし楽しい日々が回想されている。そしてその合間を縫うようにして、母親の最期の姿が執拗に彼の意識を脅かしている。

スティーヴンと母親との関係は、宗教的な事情に色彩られながら、彼の文学観とも無縁ではない。宗教との決別が神の存在を否定するに至ることはないが、文学青年を志すスティーヴンは、神と人との関わりを作者と作品へと転じている。作者は作品に対して神のような位置にあるというのが『若い芸術家の肖像』のスティーヴンの持論であったが、『ユリシーズ』に至り彼は、「神」を「父性」という概念に換え、自らの位置を定立している。それに加え、文学におけるインターテクスチャリティについても、臍の緒による人類の肉体の連綿とした接続(U: 3.37)という視点によって立ち、想像力で過去の文学との連結を読み取ろうとしている。

その一方、ブルームも私的な問題に苦しめられている。その一つは息子の死である。はるか昔のことでありながら、生後11日目にして息子ルーディが亡くなっている。このことは後継者としての存在の喪失として、あるいはその成長の喜びを味わうことのない現実への落胆として、心の内にわだかまっている。娘ミリーはすでに独り立ちしており、ブルームからいずれ離れるべき存在である。そしてルーディの死と関わるのが妻モリーの不義密通である。息子の死後、二人の間関係は希薄になり、ブルームはその責任を感じ、求婚したころの楽しい思い出に耽るにすぎない。

このようにスティーヴンもブルームもトラウマを抱えている。ロバート・スプーによれば、「悪夢としての歴史」観は、ジュール・ラフォルグに発する(Spoo, 98-104)。ジョイスはその言葉に触発され、アイルランドに対応する物語を読み込んだことになる。スティーヴンやブルームの抱えるトラウマは私的なものに思われるが、その背景には人物の意識できていない問題が伏在しているのである。スティーヴンは自らを支配する二人の主人として、大英帝国とローマ・カトリック教会を挙げているが、その事実は市民たちの記憶にも無意識に刻印されている。大英帝国はアイルランド人の母語であるゲール語を奪い、イギリスの文化による無意識の支配を推進した。ローマ・カトリック教会も祭壇からの懐柔とともに、告解という巧妙な制度によって人々の意識を支配していたのだ。

こうした状況の下、19世紀後半より民族主義が再燃した。ダグラス・ハイドは1892年の講演「アイルランドの脱英国化の必要性」において、自国の服を脱ぎ脱亜入欧をこととする日本を蔑視しながら、アイルランド独自の文化の復興を説いた。その流れに即して各種の運動が展開した。繰り返し述べてきたように、ゲール体育協会、ゲール語連盟、文芸復興協会など、アイルランド人のアイデンティティを構築する団体の設立があった。自治権獲得運動の政治指導者チャールズ・スチュアート・パーネル亡き後のこと、政治的な空白期にあたり、各種の文化運動が政治を補っていたのだ。

もちろん『ユリシーズ』のそこそこに民族主義への示唆を感じ取ることは難しくない。第1挿話ではスティーヴンのイギリス人のヘインズに対する嫌悪が描かれ、第2挿話では彼とイギリス系アイルランド人のディージー校長との対立が語られている。その後、第7挿話ではイギリスの物質文化とアイルランドの精神文化の相違が話題にされ、第9挿話では英文学のカノンとしてのシェイクスピアが論じられ、

そして第12挿話ではアイルランドの民族主義が前景化されている。さらに第15挿話ではハルマゲドンのような市民たちの混乱が綴られている。

そうした流れに即して、『ユリシーズ』にはその後のアイルランド史に関わる人物名が取り込まれている。アーサー・グリフィス、モード・ゴン、フランシス＝シーヒー・スケフィンソン、あるいはロジャー・ケイメントなどが挙げられる。いずれも1916年の復活祭蜂起に直接・間接に関わった人物である。しかしながら、『ユリシーズ』には民族主義の動向は少しも感じられない。W. B. イェイツが「1913年9月」で謡ったように、「ロマンティックなアイルランド」(Yeats, 159)は潰え、それに代わって物質主義が氾濫していたのだ。そしてブルームの一日の「収支目録」(U: 17: 1455-78)にも明らかなように、アイルランドは経済的に繁栄していたのである。百年後のアイルランドの状況と変わるところはほとんどない。

にもかかわらず、やはりイェイツが「1916年復活祭」で語るように、「恐ろしい美」(Yeats, 228)が誕生することになる。平穏な市民たちには信じがたい出来事であった。もっとも、『ユリシーズ』には、第1挿話からイェイツとグレゴリー共作の劇、『キャスリーン・ニ・フーリハン』(1902)への引用が含まれている。晩年の詩「人とこだま」(1939)でイェイツが回想しているように、この劇が復活祭蜂起を始動したとされる。民族主義を教唆する劇として受け入れられていたのである。このことから推すならば、民族主義の感情が社会の潜勢力になっていたと考えるべきだろう。

イェイツはその後、『キャスリーン・ニ・フーリハン』のパリノードであるかのような劇、『骨の夢』(1918)を書く。これは復活祭蜂起に参加した若者が追手を逃れ、アイルランド西部でダーヴォギラの亡霊に出会う物語である。若者はアイルランドにイギリス人を招き入れたダーヴォギラのみならず、この蜂起を鎮圧するためイギリス軍の側で戦闘に加わったアイルランド人兵士も酷評している。民族主義者の陥穽を突いた劇であると言ってもよからう。

当時のアイルランドもやはり内部に問題を抱えていたようだ。ジョイスは民族主義を遠景に配しながらも、ブルームに対する市民たちの猜疑心を顕在化することで、アイルランド人の他者化のメカニズムを突こうとしたのだろう。かくして地域的な事情がラフォルグの普遍的な事情へと連結する。実のところ、1904年のアイルランドでもユダヤ人への排斥が起こっていた。ユダヤ人がアイルランド人の商売を奪っているというのがその理由である。が、『ユリシーズ』では反ユダヤ主義が唱えられながらも、その実情に言及することはない。新聞社で働くブルームがその事実を口にすることもない。ダブリンの地誌や歴史に物語を貸し与えるという、ジョイスの手法としては奇妙な問題である。イギリス人のヘインズやイギリス系アイルランド人のディージー校長の口を通して、ユダヤ人が国家的な問題であると指摘させるに留まっている。

いくつかの可能性が挙げられる。一つはジョイスが当時の自国の反ユダヤ主義の運動を知らなかったという指摘であるが、ジョイスはアーサー・グリフィスやオリヴァー・セント・ジョン・ゴーガティの反ユダヤ主義を軽蔑していた。したがって、ジョイスが実情を知らなかったとは考えられない。さらにフランスのドレフュス事件との接続も認められない。1903年にパリに留学したスティーヴンが、ユダ

ヤ人と証券取引所との繋がりを回想しているにすぎない。そしてブルームも反ユダヤ主義の範例として、モロッコを取りあげながら、アイルランドのことは黙して語らない。こうした事情からすると、ブルームはアイルランドの反ユダヤ主義を語るにより、自らの定点を失いたくなかったと思われる。逆説的にも、これはアイルランドの反ユダヤ主義が苛烈であったことの証左でもある。百年前のアイルランドも現代とほとんど変わりがなかったと思われる。

ジョイスの位置

ここでジョイスの位置を検討しておくべきだろう。これまでの『ユリシーズ』の読み取りからすれば、ジョイスは民族主義に批判的であったことになる。そのジョイスの受容が今日のアイルランドとどう関わるのか疑問である。なるほどケルティック・タイガーを契機として、ジョイスがアイルランドの文化遺産になった。そのことには間違いない。が、ジョイスという作家はどう評価されるべきなのかをめぐり、これまで一致した意見はない。ローカルなアイルランド人作家であると同時に、グローバルな大陸の作家でもあるというのが通説である。

ジョイス評価の議論の前提にはリチャード・エルマンの『ジェイムズ・ジョイス伝』(1959/1982)がある。この著書はジョイスの研究誌『ジェイムズ・ジョイス・クォーターリー』(*James Joyce Quarterly*)や『ジョイス研究年報』(*Joyce Studies Annual*)においても、「伝記」というより「評伝」として、ジョイスの作品と並び、研究者必携の文献として挙げられ、いまだ聖典と見做されている。にもかかわらず、エルマンのジョイス伝には、ジョイスと政治、ジョイスとフェミニズム、あるいはジョイスとアイルランドなどをめぐる空白部も多く、最新の研究に照らしてその功績を再評価すべき時期にある。エルマンが執筆していた時代、ジョイスを知る人も生存しており、未使用の資料も数多く残された。したがって、そうした資料や新たに発掘された資料を検証すると同時に、エルマンの研究姿勢そのものも再評価すべきである。

ジョイスの存命中に、ハーバート・ゴーマンによる『ジェイムズ・ジョイス — 決定版の伝記』(1939)が刊行された。これは作者ジョイスの要望によるもので、本人の手紙や写真なども取り込み、ジョイス伝の「定本」として歓迎されたが、ジョイスの名声を高めるための評伝であったため、ジョイスにとって不都合な部分は削除されている。それに先立つ解説書、スチュアート・ギルバートの『ジェイムズ・ジョイスの「ユリシーズ」』(1930)や、フランク・バジャンの『「ユリシーズ」の成立』(1934)にしても、やはりジョイスお墨付きの啓蒙書であった。

それと対照的に、エルマンの伝記はジョイス死後の刊行で、初版は1959年のことであった。エルマンはジョイスの知人や親族など300名以上の人物と面談したばかりか、トリエステ在住のジョイスの弟スタニスロースとも交流し、多くの情報を得た。スタニスロースは兄を見守り続けた唯一の人物で、ジョイスがトリエステに残した膨大な資料を所持しており、自らもジョイス伝を試みようとしていた。その情報の恩恵を受けたのがエルマンで、その『ジェイムズ・ジョイス伝』は、スタニスロースの情報がなければ不可能な著作であった。さらにエルマンはスタニスロースの力にあずかり、ジョイス伝のみなら

ず、ジョイスの書簡集や評論集を編纂し、ジョイスについての研究書も著している。ともあれエルマンは、レオン・イーデルの『ヘンリー・ジェイムズ伝』（1953-77）や、ジョージ・ペインターの『マルセル・ブルースト伝』（1959）と並ぶ、20世紀最大の評伝『ジェイムズ・ジョイス伝』を刊行し、ジョイスの名声を不動のものとした。

もちろん決定的な評伝などありえない。ジョイスと同時代のエズラ・パウンド、T. S. エリオット、ウィリアム・フォークナーなどについても、様々な評伝が書かれている。エルマンの評伝にしても、補充の必要な空白はきわめて多い。事実、ブレンダ・マドックスは、ジョイスの妻について、『ノーラ——モリー・ブルームの実際の生活』（1988）を刊行した。また J. W. ジャクソンとピーター・コストロは、ジョイスの父親について、『ジョン・スタニスロース・ジョイス——ジェイムズ・ジョイスの父親の多様な人生と天分』（1988）を著した。そしてキャロル・ローブ・シュロスも、ジョイスの娘について、『ルチア・ジョイス——ウェイクでの舞踏』（2005）を書いた。

ジョイスを対象とした著作も刊行されている。ピーター・コストロの『ジェイムズ・ジョイス——成長の歲月 1892年から1915年』（1992）、ジョン・マッコートの『ブルームの歲月——トリエステのジェイムズ・ジョイス 1904年から1920年』（2001）、さらにゴードン・ボーカーの『ジェイムズ・ジョイス——伝記』（2012）といった著作もある。いずれのジョイス伝もエルマンを標的にして、ジョイスの生涯のうちの断片を詳述したものである。エルマンのジョイス伝をめぐっては、1959年の初版についても不満を抱く向きがあったが、1982年の増補改訂版に対しては、失望の声が高まった。887頁もの力作でありながら、初版に300ほどの修正を試み、45頁増補しただけであったためだ。それでもその後刊行されたジョイス伝は、エルマンの修正にすぎず見劣りがする。

エルマンのジョイス伝は時代に恵まれた産物であった。その後のジョイス伝がエルマンの脚注とならざるをえなかったのは、時代の都合による。それに加え、エルマンの評伝は細部を巧みに描き、文学的芳香の強い著作であった。新たなジョイス伝が試みられなかったのはそのような事情による。しかしながら、批評の動向も変貌し、エルマンのジョイス伝も再評価されざるをえなくなってきた。伝記は作家の評価に関わるものであるからこそ、ジョイスは生前中にその内容を検閲したのだ。

こうした事情に鑑み、今後のジョイス研究に向け、新たなジョイス像の定立は必須の試みである。エルマンの評伝は古典としての評価を受けてきたが、初版の刊行から早くも60年近くが経過した。その間に、新たな資料も探りあてられ、エルマンの評伝の誤謬、空白、手法などに疑義がもたれ、これまでのジョイス像への修正が必要となっている。これはジョイス研究者が等しく感じている問題である（Nadel 2002, 23）。

エルマンの誤謬はジョイスの人生と作品とを重ね、作品から人生の情報を得ているところに発する。『若い芸術家の肖像』の主人公にジョイスを対応させ、両者の微妙な相違に向かうことはない。さらにエルマンはジョイスの名声を高める都合から、客観的な事実であっても、ジョイスに不都合なことは描いていない。このことはジョイスと弟スタニスロースとの関係についても当てはまる。エルマンはスタニスロースに多くの資料を負っていたため、兄弟の確執を描くことはよしとはしなかったのだ。

こうした背景の下、エルマンのジョイス伝は決定版としての権威を失い始めている。20世紀に入り、伝記も精神分析の手法を取り込むなど、対象とする作家の個性を掘り下げ、その内面を抉ることになった。エルマンもその例にもれないが、63巻からなるジョイスの草稿、『ジェイムズ・ジョイス・アーカイヴ』(1977-79)が刊行された現在、作品の創造をめぐる新たな評伝が書かれてしかるべきだ。その他にも、『ユリシーズ』を出版したシルヴィア・ビーチ、あるいはジョイスの無二の親友ポール・L.レオンの書簡も公開された。さらにジョイスを取り込むモダニズムの文脈も詳らかになってきた。

ジョイス像

ここでエルマンのジョイス伝を参照しながら、新たなジョイス像へと論を向けておきたい。ジョイスをめぐるエルマンの評伝は、「天才作家」としての位置づけにあり、その情報源はスタニスロースとされている。その一方、エルマンの時代のアメリカは、ニュークリティシズムの影響下にあり、「天才作家」という概念から逸脱する些末な背景を描くことにはためらいがあったろう。

たとえば、エルマンは1975年に『ジェイムズ・ジョイス書簡選』を刊行している。この書簡選にはジョイスの手紙だけでなく、ジョイスに関係ある数名の人物の手紙も収められている。が、何よりも衝撃的なのは、1909年にアイルランド訪問中にノーラに宛てた手紙が含まれていることだ。これは極めてあけすけな猥褻な内容のはばかりがある書簡で、刊行に際して親族からの反対もあった。それでもエルマンが刊行したのは、ジョイスに対する人々の歪曲を払拭し、誤解を前景化するためであった。にもかかわらず、1982年の増補改訂版にその手紙が欠落しているのは、ジョイスの天才作家としてのイメージを守ろうとしたためであろう。

『ユリシーズ』第9挿話ではスティーヴン独自のシェイクスピア論が国立図書館で語られている。その内容は『ハムレット』を中心に、シェイクスピアの私生活が彼の作品すべてに映し出されている旨の内容である。このスティーヴンと対照的なのが聞き手たちで、シェイクスピアの私生活と作品は無縁であるとしている。聞き手たちの姿勢はテキストのみを研究対象とする、いわゆるニュークリティシズムと変わらない。スティーヴンは登場人物であり、その立論を支持するいわれはないが、すでにエルマンは『若い芸術家の肖像』でスティーヴンを擁護していたはずである。が、エルマンのジョイス論も国立図書館の聞き手たちと同じであり、その文学観はニュークリティシズムに近い。聞き手たちはシェイクスピアが天才であったことを前提として、作者の些末な出来事と作品とを分離している。ジョイスと弟スタニスロースとの対立は、カインとアベルの対立にも等しかったが、エルマンはその問題には立ち入らない。

そうした姿勢はエルマンのアイルランド問題にも関わっている。エルマンは1954年にW. B. イェイツの伝記を手始めに、ジョイス伝を仕上げ、さらに1969年にはオスカー・ワイルド伝を刊行している。こうした業績から推すかぎり、エルマンがアイルランド事情に精通していたことは明らかである。にもかかわらず、エルマンはジョイスのアイルランドからの離脱が、経済事情によるものではなく、大陸の広い文学への憧憬によるものであるとしている。これは『ダブリンの市民』におけるくすんだ街並みか

ら離れ、躍動する大陸へ憧れる『若い芸術家の肖像』のステイーヴンに同調したものと思われる。そうした思い込みによるものかどうか判断はできないが、『若い芸術家の肖像』の冒頭部のステイーヴンの居住地について、きわめて曖昧な描写になっている。初版の読者が指摘するまで、ステイーヴンの幼な友だちのアイリーンの家を調べることもなかったのだ。エルマンにはジョイスとアイルランドを接続する、緻密な視点が欠如しているように思われる。

エルマンのジョイス伝におけるアイルランド事情の欠如は、いくつかの文学的な誤解を招いている。その一つがイエイツ、シング、グレゴリーたちとジョイスの接続である。先に指摘したように、『ユリシーズ』第9挿話ではステイーヴンのシェイクスピア論が語られ、それに対する聞き手の反論が続く。これら聞き手たちの背後にイエイツ、シング、グレゴリーといったアイルランド文学ルネサンスの巨物が潜んでいることは間違いないが、それらの人物に対してのみならず、聞き手たちとジョイスの間にも険悪な繋がりはないはずである。聞き手のジョン・エグリントンもジョイスと親密で、ジョイスは国立図書館を頻繁に訪れ、様々な影響を受けていた。一般論として、イエイツとジョイスの間には対立が想定されているが、それはカトリックとプロテスタントという、かつての民族主義者たちの敵対を引きずったままの議論にすぎない。

ジョイスは土着のケルトのカトリックであるのに対し、イエイツはイギリス系アイルランド人のプロテスタントである。この出自の相違は文学観の相違でもある。民話によって立ち、田園賛美をかこちながら、アイルランドのアイデンティティの構築に力を入れたのがイエイツたちであるならば、ジョイスは都市ダブリンをくまなく探索し、その明暗を映し出した。この対立が誤解であることは、イエイツの文学的変貌にも明らかである。『アシーンの放浪』(1889)などの物語詩、あるいは『キャスリーン伯爵夫人』(1899)などを刊行した後、1916年の復活祭蜂起あたりから、イエイツが現実の世界との関わりを強めていったことを無視するわけにはゆかない。

イエイツとジョイスとの対立という図式はエルマンに限ったことではなく、アイルランドの文学研究においてはほぼ当然のことと受容されている。にもかかわらず、アイルランドのジョイス研究はエルマンとは逆行した。それはジョイスのモダニズムに関わる評価にある。ジョイスはダブリンを舞台としながらも、アイルランド事情と関わりがないというのがエルマンである。それに対してアイルランドの研究者たちは、大陸に留まりながらも、ジョイスのモダニズムの手法が、アイルランドの特殊事情から誕生したと論じる傾向にある。

とりわけアイルランドの近年のジョイス研究における、ジョイスと政治状況との接続は斬新な着想である。『ユリシーズ』の執筆は1914年から1921年までのことで、その間、第一次大戦、復活祭蜂起などの事件が起こっている。ジョイスはこれらの事件と無縁であったのかどうか、意見の分かれるところである。これまでジョイスは政治とは無縁なモダニストと言われてきたが、近年、ジョイスと政治との関わりが前景化されるようになった。アイルランドはイギリスの植民地支配下であり、ダブリンがくすんだ都市であったのも、そうした支配によるものである。『ダブリンの市民』にしても、ジョイスと政治を無視しては論じられない。イギリス系アイルランド人の存在が大きくクローズアップされている。

エルマンのジョイス伝との関わりでもう一つ問題なのがモダニズム論である。何よりも出版事情をめぐる事情についての空白がある。ジョイスの作品はアイルランドで出版されることはなかった。これは検閲にまつわる問題があったためだ。そもそも『ユリシーズ』は検閲と密に繋がっている。1922年にパリで刊行されたものの、各国で発禁処分となった。アメリカでその処分が停止されたのは1933年の裁判を経てのことである。こうした検閲はすでに『ダブリンの市民』から始まり、ジョイスの著作はいずれもアイルランド国外での出版であった。その実情も念頭に入れたい。

こうした背景の下、ジョイスの作品は当時のパトロンと結びついている。とくにエズラ・パウンドの支援が大きい。ジョイスに執筆の機会を与えたのはパウンドであるからだ。『若い芸術家の肖像』の連載はイギリスのハリエット・ショー・ウィーヴァーの『エゴイスト』誌で、これもパウンドの紹介による。また『ユリシーズ』の『リトル・レビュー』への連載も、やはりパウンドの推薦による。そして『フィネガンズ・ウェイク』のほとんどがユージン・ジョラスの『トランジション』に連載できたのも、パウンドの影響による。

エルマンのジョイス伝の欠落部は、こうしたジョイスの作品の底を流れる変貌についての洞察である。今にしてようやくのこと、シルヴィア・ビーチとジョイスとの間で交わされた、書簡集が刊行された。それに加え、ポール・L. レオンの書簡集も刊行された。ジョイスのパリでの暮らしにおいて、1930年まではビーチ、その後はレオンが引き継いで支えた。エルマンはいずれの書簡も目にはなかった。とりわけレオンの書簡は貴重である。彼は第二次大戦のさなか、パリに残されたジョイスの書簡を50年の間封印しておくとの条件でアイルランド大使に託し、ユダヤ人であることで収容所に送られた。エルマンにはこうした背景を取り込むことが許されなかった。かくして新たなジョイス像の定立が必須である。ジョイスの内面をのぞいておきたい。

アイルランド人作家としてのジョイス

ジョイスは大陸に留まりながら記憶としてのダブリンを描いたが、そのダブリンはあくまでジョイスのダブリンであった。上流階級の華やかさや悲しみも、あるいは下層階級の悲惨な日常とも無縁である。あくまで中流階級の下層の人々の物語が中心となっている。ジョイスはダブリンの全景を描こうとしたわけではない。それに加え、『ユリシーズ』のダブリンが1904年6月16日で停止しているわけでもない。末尾に記された「トリエステーチャーリーヒーバリ 1914年から1921年」という言葉は、創作時の空間的な距離と時間の流れを示している。ジョイスの創作の意図が問われる。

ダブリンを微細に描くことで、ジョイスが自らを生成した背景と向き合っていたことに相違ないが、それと同時に大陸的な意識を持つ人物、レオポルド・ブルームをその街に投入したことを見失うことはできない。その一つの答えは民族問題であっただろう。『ダブリンの市民』においては、市民たちの麻痺的な事情をめぐる皮肉を込めて描いた。続く『若い芸術家の肖像』においては、自国からの離脱という手段により、民族の後進性を露呈しようとした。『フィネガンズ・ウェイク』においては、移民者である主人公をめぐる狭隘なダブリンの情景を描いた。いずれも『ユリシーズ』と同じく、舞台としての

ダブリンの閉塞した状況がテーマとなっている。

こうした作品を前に、評価のほとんどがその文体へと傾いている。ジョイスの評価も名声も大陸で確立したもので、アイルランドでの受容はそうした国際的な流れを無視しえなくなったことによる。アイルランド人作家としてのジョイスはあくまで一面にすぎない。ダブリン市内にあるジョイスのブラックを頼りにその作品に接することで、観光客は百年前の姿に接した満足を味わうが、それではジョイスを化石化するにも等しい。『若い芸術家の肖像』から『フィネガンズ・ウェイク』に至るまで、ジョイスはその末尾に執筆の場所と期間を記したはずである。読者はその意味を再考する必要がある。

移民者を統制する今の国策にはそれなりの道理もあるが、ケルティック・タイガーという繁栄を支えたのは移民者であった。ジョイスも自国を離脱した後、国外の都市で移民者として暮らしていた。アイルランドにとって、今もって移民は大きな問題を孕んでいる。兄弟姉妹がそれぞれ異なる国に居住している例も多い。ケルティック・タイガーが崩壊した今日、アイルランドもブランド品としてのジョイス像を再考すべきである。

もちろん新たな「ジョイス像」といった場合、ロラン・バルトやミシェル・フーコーの作者への攻撃の後、どう定立されるべきか断定はできない。おそらくジャック・スティリンガーに倣い「多様なジョイス像」を目指すべきかもしれない。今や批評も錯綜としているばかりか、ジョイスの作品の版の問題も加わり、一定したジョイス像を構想することは難しい。が、新たな断面を積み重ねることは可能である。伝記的な言説とテキストの言説を撚りながら、固定した評伝からの飛躍が得られるはずである。ケルティック・タイガー後のアイルランドにとっても、求められるのはやはり新たなジョイス像の定立である。

科研研究課題番号：20370355

引用・参考文献

- Cheng, Vincent J. "Authenticity and Identity: Catching the Irish Spirit." In *Semi-Colonial Joyce*, ed., Derek Attridge and Marjorie Howe (Cambridge: Cambridge UP, 2000), 240-61.
- Davison, Neil R. *James Joyce, Ulysses, and the Construction of Jewish Identity* (Cambridge: Cambridge UP, 1996).
- Ellmann, Richard. *James Joyce* (Oxford: Oxford UP, 1982).
- Fahy, Catherine, ed., *The James Joyce/Paul Leon Papers* (Dublin: National Library of Ireland, 1992).
- Kiberd, Declan. "Strangers in Their Own Countries." In *Multi-Culturalism: The View from the Two Irelands*, ed., Declan Kiberd and Edna Longley (Cork: Cork UP, 2001), 45-74.
- King, Jason. "Memory of These Migrations: Joyce, Interculturalism, and the Reception of *Ulysses* in the Irish Immigration Debater." In *Joycean Unions: Post-Millennial Essays from East to West*, ed., R Brandon Kershner and Tekla Mecsnober (Amsterdam: Rodopi, 2013), 95-108.
- _____. "Commemorating *Ulysses*, the Bloomsday Centenary, and the Irish Citizenship Referendum." In *Memory Ireland: James Joyce and Cultural Memory*, ed., Oona Fraley and Katherine O'Callaghan (Syracuse: Syracuse UP, 2014), 172-86.

- Lentin, Ronit. "Anti-Racist Response to the Racialization of Irishness: Disavowed Multiculturalism and its Content." In *Racism and Anti-Racism in Ireland*, ed., Ronit Lentin and Robbie McVeigh (Belfast: Beyond the Pale, 2002), 226-38.
- McCourt, John. "Reading Ellmann Reading Joyce." In *Joyce's Audience*, ed., John Nash (Amsterdam: Rodopi, 2002).
- McGann, Jerome J. *Social Values and Poetic Acts: The Historical Judgement of Literary Work* (Cambridge: Harvard UP, 1988).
- Nadel, Ira B. "The Incomplete Joyce." In *Joyce Studies Annual*, 1991 (Austin: U of Texas P, 1991).
- _____. "Joyce and Blackmail." In *Joyce and the Joyceans*, ed., Morton P. Levitt (Syracuse: Syracuse UP, 2002), 23-32.
- Rickard, John S. *Joyce's Book of Memory: The Mnemotechnic of Ulysses* (Durham: Duke UP, 1999).
- Stillinger, Jack. *Multiple Authorship and the Myth of Solitary Genius* (Oxford: Oxford UP, 1991).
- Whelan, Yvonne. *Reinventing Modern Dublin: Streetscape, Iconography and the Politics of Identity* (Dublin: UCD P, 2003).
- Wicht, Wolfgang. *Utopianism in James Joyce's Ulysses* (Heidelberg: Universitätsverlag C. Winter, 2000).
- Yeats, W. B. *The Poems*. Ed., Daniel Albright (London: Everyman, 1994).